「心に響いた二つの論考」　　2026 年 01 月 02 日

岩波の『世界』12 月号に掲載された二つの論考が心に響いた。それを短く紹介したい。一つは、NHK の論説主幹の鴨志田郷氏の「ガザ、ニューヨーク、ハーグ 国連 80 年目の憂鬱」である。彼は国連職員でも外交官でもなく、ガザの人道支援取材の現場から、国連やハーグの国際法廷を見聞きする立場にある。国連は第二次世界大戦後、193 ヶ国からなる国際秩序を形成し、世界の平和と繁栄、人類の権利の向上を目指して働き、それなりの成果をあげてきた。ところが最近は、国連に対し「無益だ」「存在意義がない」と批判が絶えない。ウクライナ戦争は終わりが見えず、悲壮感漂うゼレンスキー大統領は国際社会に支援を求めるが、支援熱は年々冷め、ロシアの軍事侵攻は止まらない。イスラエルのガザ攻撃に対し、安全保障理事会で戦闘の停止を求めるが、米国は拒否権を使って阻止してきた。

鴨志田氏は、「国連という『大企業』の方針がＰ5（米英仏中ロ）の『大株主』たちの『談合』や『内紛』によって決まってしまい、事務総長という『社長（グテーレス)』はそれに抵抗すらできない」と書いている。大国、殊に米ロの横暴が国連の機能を阻害している。グテーレスは「率直に言って非常に苦しい…」とつぶやいているそうだが、理解できる。「大国支配」の安保理に愛想をつかし、国際法上の「正義」を求め、ハーグの国際法廷や国際刑事裁判所に熱い視線を向けるが、どんな判決や、逮捕状が出ようと、国際法を犯している者たちはお構いなし、逆に、国際法廷や刑事裁判所を恫喝している。鴨志田氏は「世界が過ちを繰り返さないためにつくられたはずの国連が、再び過ちを繰り返される場とならぬよう、80 年前の原点に立ち返ってその姿を正していく取り組みが、いまかつてなく求められている」と訴えている。大国が振り回す「拒否権」が問題であることは、周知の事実である。彼は心に涙を流しながら、正義に基づく国際法が順守されることを求めて書いている。私は、彼の思いを理解でき、心を打たれた。ただ、第一次世界大戦後にできた国際連盟の時のように、国連を脱退する国がないことが、わずかな希望だと思っている。

もう一つは、社会学の研究を専門にしている大竹裕子氏の「トラウマを脱植民地化する」である。ルワンダではフトゥ族とトゥチ族の間で、何十万人という虐殺があった。彼女は、ルワンダに生じた「トラウマ」の低減を目指して、彼の地に行った。ベトナム戦争後、帰還した兵士たちはトラウマで PTSD を発症し、治療方法を編み出していった。ところが、その治療は、植民地を支配する仕組みの西洋医学で、帝国主義的制度でしかなかったと、大竹氏は分析する。ルワンダの人々の文化が違うので、トラウマ治療は効力がなかった。彼女は色々な体験をする。無力さに泣いていると、「泣くな、笑え! 涙はもう、たくさんだ。何でもいいから、仕事をしろ」と、隣人との関係を持てと、言い放たれた。また、疲れてベンチで涼んでいると、老女が近づいて「お前さんは、私たちを愛してくれている。ありがとう」と言ってくれた。ルワンダには「ウブントゥ」という思想があり、「人間であること」を意味し、人間は「共に在る」存在と考える。人間は隣人との関係性の中にある。「I am because you are(あなたが居てくれるから、私も居ることができる)」というアフリカ的共同体認識である。別な言葉で言えば、「I am because we are(私たちが居るから、私は存在することできる)」ということである。大竹氏は、「近代化が押し進めた個人主義や合理主義、個人がどこまでも合理的に利益を追求してゆく新自由主義、そしてコロナ禍が生み出した分断。私たちはもう一度、つなぎなおす手がかりとなる記憶が、ウブントゥ ― 人間であること ― のなかにあるのかもしれない」と結んでいる。あれだけのジェノサイドを起こしたルワンダに、生きた関係性の中で人間を捉え、共にあろうとする文化が息づいていることを知らされ、温い思いになった。心に響く、嬉しい論考であった。